ポリクラシーの政治力学
——ナチ支配の解釈をめぐって——

田　野　大　輔

1　はじめに

近代における支配のありかたを考えるうえで、ナチズムほど格好の対象はない。それは、ナチズムが近代支配の矛盾をまったく極限的に、またグロテスクなかたちで実演してみせたからである。かつてF・ノイマンはナチ支配体制をビヒモス、すなわち無国家とよんだが、そのような野蛮な体制がほかならぬ今世紀に出現したという事実は、われわれにたいして容易ならざる問題を提起しているのだ。

ナチ支配体制を総体的に把握しうるような理論的枠組みは、いまだに確立されてはいない。これまでの体制認識においては、「全体主義」概念に象徴される単色のイメージが支配的であった。独裁者ヒトラーの絶対的意志が貫徹し、社会の末端まで統合された一枚岩的な支配体制というこのポピュラーなイメージは、しかしながら、近年の実証研究が体制内部の著しい競合・対立を明らかにするにおよんで、説得力を失いつつある。とはいえ、その結果第三帝国の全体像がより鮮明になったとは必ずしもいえない。むしろそれは、おびただしい文献を前にして、いっそう不明瞭になっているというのが偽らざる現状である。ナチズム研究が些末な個別研究に没入すべきでないとすれば、ナチ支配構造全体の理論的把握をめざす努力は依然として必要であろう。

この課題にとりくむにあたっての本稿の出発点は、支配のイデオロギーとその政治的現実とを明確に区別するという方法論的視角である。研究史を概観すればわかることだが、今日のナチズム研究の混迷はこうした方法をとることによってのみ克服することができる。本稿では、このような視角から既存の研究を再検討し、イデオロギーと政治的実践のダイナミックな相互関係に焦点をあてることによって、ナチ支配構造の総体を把握してみたい。その際とくに、近年多くの論者によってもちいられるようになった「多頭制（Polykratie, polycracy）」概念を適用し、その枠組みのなかでナチ体制の根本的な政治力学を明らかにしてゆくことにする。これに成功すれば、それは近代国家一般の理解の進展にたいしてもいくらかの貢献をなしうるであろう。

2 研究史と分析視角

ナチ支配の解釈をめぐっては、これまで大きくわけて二つの立場があった。第一のものはK・D・ブラッハーらに代表される立場で、ナチ体制を統一的な「指導者国家」と想定する全体主義理論の系譜である[1]。それによれば、ナチ体制はヒトラーの意志に従属した一枚岩の国家――「統一的で、最高度に中央集権化され、ナチ党によって統制された一元的国家」[Bracher u.a., 1960:373]――であったということになる。このポピュラーなナチズム像は、実証研究によって著しい内部対立が明らかにされた今日でも、依然として強い影響を保っている。体制内の競合・対立もしばしばヒトラーのマキャヴェリスティックな計画の結果であると説明され、あらゆる政策決定における彼の主導的な役割が想定される。こうしたヒトラー中心主義的アプローチは、最近ではK・ヒルデブラントらのいわゆる「意図主義」学派の見解に代表される[2]。彼らはナチズムの本質をヒトラー個人の世界観およびイデオロギーのうちにもとめ、ナチ政治はこれを首尾一貫して実現した過程であったと主張するのである。

この立場の問題点は、一枚岩的な権力機構を想定するとともに、その頂点に立つヒトラーの世界観に関心を集中させることによって、結果的に体制内の競合・対立を看過していることにある。つまり彼らは、ナチズムの全体主義的なイデオロギーと体制の政治的現実とを素朴に同一視しているにすぎず、このような観点からはナチ支配の実態やそのメカニズムを解明することはできない。第三帝国が「指導者国家」を標榜していたことはたしかであるが、それを現実として実体化することは、ナチスの宣伝を鵜呑みにすることに等しいといえよう。

これにたいして第二の立場は、「指導者国家」における「指導のカオス」[Bollmus, 1970:236]に着目するもので、M・ブロシャートやH・モムゼンらのいわゆる「機能主義」ないしは「構造主義」学派の立場である[3]。第三帝国の内部構造に焦点を定めた彼らの研

---

[1]代表的な全体主義論者としては、K・D・ブラッハー、H・アーレント、S・ノイマン、C・J・フリードリヒらがあげられる。彼らは、ファシズムと共産主義がその本質的特徴においては同一であるとして、一枚岩的な支配体制を想定する。くわしくは栗原の論考[栗原, 1973]を参照。

[2]「意図主義」および「機能主義」の区分は、T・メイスンの用法によるものである[Mason, 1981]。代表的な「意図主義」者としては、K・ヒルデブラント、E・イェッケルらがあげられる。彼らはヒトラー個人の世界観を重視するために「ヒトラー主義者」あるいは「プログラム学派」などとよばれるが、そうした立場からH・モムゼンらの「機能主義」的解釈をナチズムの過小評価へつながるものとして批判し、これを「修正主義」とよんでいる。両者の論争については佐藤の論考[佐藤, 1982]を参照。

究は、それまでの一枚岩的なナチズム像を批判し、これをうちやぶることに成功している。それによれば、ナチ体制は全体主義システムとは程遠いものであり、むしろ激しく衝突しあう複数の権力ブロックにひき裂かれたモザイク状の国家であったという。ここに想定されるのは、さまざまな権力関係がもつれあった一種のカオス――すなわち「組織のジャングル」[Broszat, 1969:439]ないしは「機構的アナーキー」[Mommsen, 1971:713]――である。こうしたアモルフな第三帝国像にたいして、近年では「多頭制」という概念規定をあたえる研究が多くなっている。一枚岩とされた「指導者国家」も、かなりの程度までが神話にすぎなかったことが明らかにされたのである。

この第二の立場は、ナチズムのイデオロギーとその政治的現実とを明確に区別し、イデオロギー的目標がいかなる権力関係を通して実現されたかを問うことによって、ナチ体制の政治力学の分析に道を開いた点に大きな意義をもっている。とはいえ、体制内部の「カオス」の存在じたいは今日では常識化しているから、われわれにとっての問題は、これをどのように解釈し、体制の根本的構造の理論的把握へと結びつけていくかということである。その意味では「機能主義」学派の最も大きな弱点も、こうした理論の整備が進んでいないことにある[Broszat, 1969:9]。「多頭制」という概念規定をもちいる場合でも、それが「指導のカオス」についての静態的な概念として理解されるなら、ほとんど意味がないものとなる。むしろ、ナチ政治の無体系性・即興性を包括的に説明しうるようなかたちで、この概念を体制の政治力学の解明につなげていくことが必要であろう。

「機能主義」的アプローチのもうひとつの問題点は、それが体制のカオス的内部構造に目を奪われるあまり、そのような錯綜状態とイデオロギーとのつながりをほとんど解明せず、両者の「乖離」を指摘するにとどまっていることである。そこでは、ナチ・イデオロギーは現実からかけはなれた単なる欺瞞ないしは道化芝居であり、支配という目的のための道具にすぎないとされる。したがって、ナチズムとは世界観を装ったまったく機会主義的な「ニヒリズムの革命」であるということになり、結局のところ研究対象としてのイデオロギーが意味を失うのである。これにたいする本稿の立場は、ナチ政治におけるイデオロギーの名誉復権をめざすものだ。とはいえ、それは「意図主義」的なアプローチではけっしてない。われわれがとるべき道は、ナチズムを動かしつづけた全体主義的なイデオロギー

---

[3]代表的な「機能主義」者としては、M・ブロシャート、H・モムゼン、P・ヒュッテンベルガー、R・ボルムス、T・メイスンなどがあげられる。彼らは全体主義理論にもとづくナチ体制へのアプローチを批判し、政策決定過程の構造的な分析を主張する。ヒトラーについても、従来のように彼個人の役割を絶対化するのではなく、むしろナチ権力構造における一要因として機能的にとらえる。本稿は基本的にはこの「機能主義」の立場に立つものである。

と、それを不完全なかたちでしか実現できなかった政治組織との間のダイナミックな関係をあとづけていこうとするものでなければならない。

そもそも、いかなる政治的権威もつねにイデオロギーという文化的枠組みを必要としており、その枠組みなかで政治それじたいが定義され、その目標が設定される。C・ギアツがいうように、イデオロギーとは「政治問題を定式化し、それについて考え、それにたいして反応するための象徴的枠組み」[ギアツ, 1987 II:45]であるからだ[4]。つまり、イデオロギーなしに政治は不可能であり、イデオロギーは政治の手段というよりはむしろ、それじたいが政治の目的である。しかし、両者の関係はたがいに還元されあうようなものではない。むしろわれわれは、両者を緊張関係に立つものと考えねばならない。ナチ体制においても「指導者国家」のイデオロギーと現実の「指導のカオス」とは明白なコントラストをなしていたが、両者の張りつめた緊張関係こそがナチ支配のダイナミズムを形成していた。これはまさにギアツが「文化的誇大妄想と組織的多元主義とのパラドクス」[ギアツ, 1990:20]とよんだ関係であり、そこではイデオロギーのうえでの高度の統合主義と現実における根深い派閥主義とが逆説的にもたがいに補完しあっていたのである。本稿では、ナチ政治力学の原動力をこの「イデオロギーと実践のパラドクス」というべきものにもとめたい。

このような本稿の立場は、支配の正当性信念とその装置とを分析的に区別し、そこから支配の諸類型を構成したウェーバーと基本的な観点を同じくするものである。とりわけ、彼の「マシーンをともなう指導者民主主義」という構想は、カリスマと官僚制の緊張関係のなかに現代の政治指導の可能性を位置づけた点で、ナチ支配体制の分析にとってもきわめて重要な手がかりをあたえてくれる。ただし、ウェーバーの議論をそのままのかたちで適用することはできない。第三帝国における「指導のカオス」は、彼が提示した合理的・統一的な官僚制モデルの射程を超えているからだ。むしろM・マンがしめすように、近代国家の複雑な組織は——官僚制的装置のほかに——いくつかの相互に連結した、だが相対的に自律した権力基盤からなるものと考えるべきであろう[Mann, 1986]。軍事的権力・経済的権力・イデオロギー的権力とよぶべきこれらの自律的領域は、官僚制を基盤とする狭い意味での政治的権力とともに、たがいに連合と対立をくりかえしながら錯綜した支配の状況を構成する。こうした支配のありかたにたいして、われわれは「多頭制」という概念規定をあたえたいとおもう。

「多頭制」の概念は近年のナチズム研究において——とくに「機能主義」の陣営で——

---

[4]ギアツの政治理論については、拙稿[田野, 1994b]を参照。

広くもちいられるようになった概念であり、P・ヒュッテンベルガーによれば、「多頭制」とは「特定の条件のもとでたがいに闘争しうる、多数のかなり自律的な支配の担い手」[Hüttenberger, 1976:420]のことをいう。こうした観点から多頭制論者は、ナチ支配体制が、イデオロギー・利害・人的構成・活動様式においてそれぞれ異なったいくつかの権力ブロックの集合のうえに成り立っていたと主張する。研究者によって挙示する数・種類・権力関係にかなりの違いがあるが、おおむねナチ党・国家官僚制・国防軍・産業界という四つの権力集団が重視されている[5]。もちろん、これらの集団もそれぞれの内部で緊密な一体性をもっていたわけではないが、ナチ体制の根本的な政治力学——とくに後に見るような「累積的急進化」のメカニズム——は、この四者相互の関係によって規定されていた側面が強い。したがって本稿では、M・マンのモデルに沿うかたちで、この四つの集団の競合と癒着のうえにナチ「多頭制」を概念化することにしたい。「指導者国家」のファサードの背後で、これら権力集団はたがいに摩擦と軋轢をくりかえし、体制全体に錯綜した支配の様相を刻印した。ここに想定される「多頭制」は、ウェーバー的な官僚制支配とはおよそ裏腹の、内部構造の混乱と権限系統の錯綜によって特徴づけられるカオス的な支配である。ナチ体制の政治力学を明らかにしていくうえでは、われわれはさらにこの多頭制的支配とヒトラーの権力との関係にも考察をすすめる必要があろう。

さて、これで本稿の基本的な分析視角を提示しおえたので、以下では既存の研究に再検討をくわえながら、より具体的にナチ多頭制の政治力学を明らかにしてゆくことにしたい。その際のわれわれの分析の焦点は、イデオロギーと制度の相互関係にあてられる。それゆえ、実際には無理なことなのだが、あくまでも記述をわかりやすくするために、両者をわけて論じていくことにする。まずはじめに、次節でナチ・イデオロギー——政治的実践を規定し、それに方向と意味をあたえる文化的枠組み——の構造を考察し、ナチズムが政治権力というものをどのように理解していたのかということを検討する。次に、そうしたイデオロギーに規定され、これを実現するはずのものでありながら、現実にはそれとは正反対の方向へむかったナチズムの政治的実践——イデオロギーの社会的基盤としての政治組織や政治的装置——を考察し、ナチ体制において政治権力が現実にどのように組織されたのかを見ていく。

---

[5]たとえばF・ノイマン[Neumann,1963]は、第三帝国がナチ党、国防軍、官僚制、産業界という四つの集団の競合と癒着のうえに成り立っていたことを指摘しているのにたいし、P・ヒュッテンベルガー[Hüttenberger, 1976]はナチ党、国防軍、産業界の三集団を重視し、国家官僚制をとりあげていない。

3 ナチ・イデオロギーの構造

ナチ・イデオロギーについて、その政治観の中心的要素を――政治組織との関連づけに役立つかぎりで――次の三つに提示しようとおもう。第一のものは、「民族共同体」というユートピア的理念である。第二のものは、この理念を体現する「指導者」のイメージとそれを政治組織に翻訳する「指導者原理」である。第三のものは、社会ダーウィン主義的な「闘争」概念――「民族共同体」を実現するためには容赦のない「闘争」が必要だという考え方――である。

（1）「民族共同体」理念

「民族共同体」とは、一言でいえば、一切の階級対立を超越した統一的な社会を約束するナチ的概念である[9]。ヴァイマル共和国においては諸政党が競合・対立していたのにたいし、ナチズムはあらゆる階級闘争の廃棄と新たなる国民的連帯の創出――「国民の内的結束」の実現――を目標にかかげて登場した。ナチズムとは、彼ら自身の定義にしたがえば、特定の階級や身分のためではなく、「民族共同体」全体の福祉のための政治を意味していたのだ。

このユートピア的理念は、紛争のない社会の再生を切望する広範なドイツ国民、とりわけ中間層にたいして大きな吸引力を発揮した。そして、この「民族共同体」を建設するためにおこなわれたのが、いわゆる「均制化（Gleichschaltung）」である。国家・社会のトータルな画一化をその内容とする「均制化」の過程は、ラントや地方自治体の解体にはじまり、非ナチ政党の解散や自律的な政治・経済組織および労働組合の破壊・再編成を経て、わずか一〇ヵ月をもって完了する。三三年一二月には「党と国家の統一を確保するための法律」が布告され、ヒトラーを頂点とする全体主義国家の樹立が宣言されるのである。

しかしながら、「民族共同体」理念に表現された統一的秩序のイメージそのものは、きわめて曖昧なものであった。「民族共同体」はなんらかの確固たる秩序をそなえ、広大なひろがりを有する空間として表象されていたが、それは一貫した政策やプログラムへと発展することはなく、ユートピア的・千年王国的な目標にとどまった[田野, 1994a]。ここには明らかにヒトラーの戦術的考慮がはたらいていた。たえず大衆の獲得をめざしたナチ運動にとって、目標を明確にすることで潜在的な支持者を失うという結果は避ける必要があっ

[9]この「民族共同体」の概念を、ナチ政治の基底にある「意味空間」として分析したものとして、拙稿[田野, 1994a]を参照。

たし、目標を定義すれば、それをもとにヒトラーに楯つく党員がでてくる可能性があったのである。したがって、ナチ世界観指導者ローゼンベルクの公式のコメンタールにもかかわらず、イデオロギーの曖昧さが解消されることはなく、ドグマの確立は妨げられた[フライ, 1994:142]。イデオロギーの次元で明確にされなかったことは、「運動」の実践のなかで具体化され、実行されることになった。「民族共同体」という目標はぼんやりとしていたが、それだけにますますダイナミックな政治的実践が必要となった。大衆集会や大衆行進のなかで演出されたこのダイナミズムが、「民族共同体」をいきいきとした意味でみたし、熱狂的な高揚感をあたえてくれたからである。

（2）「指導者」と「指導者原理」

この「民族共同体」の中心に位置し、漠然としたナチ世界観に方向と意味と形をあたえる凝集力、その媒体が「指導者」ヒトラーであった[Broszat, 1970:399]。「ひとつの民族、ひとつの帝国、ひとつの指導者」という有名なスローガンにしめされるように、ヒトラーは単に統治機構の長であったばかりでなく、「民族共同体」を一身に体現する存在、国民的統合の象徴そのものであった[カーショウ, 1993:273]。彼はユートピア的な世界観を政治と組織に翻訳する象徴的存在であり、ナチ体制はイデオロギーと組織の支点に「指導者」をおくことによってはじめて、ダイナミックな社会的統合力を獲得しえたのだった[Broszat, 1970:401]。この指導者像はゲッベルスの宣伝によって包括的な「指導者神話」に仕あげられ、ナチズムの政治的想像力の中核を形成した。そのシンボリズムはアレゴリーにもとづいており、これによってあらゆるものがヒトラーの公的身体に投影されることになった。三四年の党大会でヘスが語ったように、ヒトラーは指導者であると同時に「党」であり、「ドイツ」でもあったのだ。

こうした「指導者」と政治的秩序との同一視は、単なるアレゴリーにとどまらず、ナチズムの政治理論を端的に表現するものであった。つまりこれは、ナチ支配の正当性が指導者ヒトラーの「カリスマ的」権威のうえに成り立っていることをしめしているのだ[7]。しかもこのカリスマ的原理は、いわゆる「指導者原理」として党組織の末端にまで貫徹し、ナチ政治指導のスタイルを規定することになった。「全指導者の権威は下へ、そして責任は上へ」[ヒトラー, 1973 下:117]という表現にしめされるとおり、この無条件の指導者の

---

[7]実際にも、カリスマ的正当化の原理は「国民投票」というポピュリスティックな制度に適用されたし、また国防軍と官僚制が「ドイツ帝国および国民の指導者」たるヒトラーにたいして人格的な忠誠の宣誓をおこなったことは、彼の権力がそのカリスマにおいて叙任されたものであることをしめしている。

権威の原理は、ヒトラーを頂点とする強力な命令の体系をつくりあげるものとされたのだった。

したがってナチ体制は、そのイデオロギー的教説が主張するところにしたがえば、「指導者原理」によって緊密に組織されたフェルキッシュな「指導者国家」であった。しかしわれわれは、このイメージをうのみにして、ナチ支配構造を一枚岩のピラミッドへと還元してはならない。というのも、この組織原理は一元的な統治機構の確立をめざすものではけっしてなく、政治的実践の次元ではむしろその正反対の方向にむかうものだったからである。実際のところ、指導者の神秘的な「直観」や「全能なる摂理」といっても、それは法規範にもとづく統一的行政にたいしては解体的に作用せざるをえないであろう。T・メイスンが「行政なき政治」[Mason, 1981:24]とよぶように、「指導者の意志」に名をかりたナチズムの状況適応的でアドホックな政治スタイルは、合理的・計画的な政策を欠いた即興的な措置をたえず生みだし、行政的基盤をほりくずした。しかも「指導者原理」は、各レヴェルのナチ・メンバーの主体的な政治活動と権力行使をおおいに奨励するものであった[8]。ヒトラーの「人格的指導」は、規則にもとづくザッハリッヒな義務遂行よりも、指導者にたいする絶対的な「忠誠」と盲従を優先し、もっぱら彼の人格的権威に結合されたパーソナルな関係を通して支配をおこなうことを意味した。H・モムゼンが指摘するように、「指導者原理」は、ヒトラーの権威に抵触しないかぎりにおいて下級指導者に無制限な自由裁量をあたえるという原則にほかならなかったから、個々の下級指導者の間のたえまない権力闘争や競合を排除するものではなかったのである[Mommsen, 1983:4]。党幹部たちはヒトラーには盲目的に服従するが、たがいには深く憎みあう「リトル・ヒトラー」の寄せ集めであって、彼らはたえずナチ世界観の具現者たるヒトラーを自分の考えの側に獲得しようと努め、彼の寵愛をめぐって激しく争った[9]。絶対的な「指導者の意志」も、実際には根深い派閥闘争の隠れ蓑にほかならなかったのだ。

この点についてM・ブロシャートは、「指導者の意志」が具体的な命令や指令というよりはむしろ、シンボリックなものにすぎなかったと指摘している[Broszat, 1970:408]。「東方生存圏」の獲得といった目標でさえ、たえざる政治的動員のイデオロギー的メタファー

---

[8]ヒトラーは『卓上語録』のなかで次のようにのべている。「大管区指導者や知事といった地方の指導者に自由裁量をあたえることによってのみ、真に能力のある者を見いだせるのだ。地方に自由裁量がなければ、やがて官僚主義がはびこるだけだ。地方の指導者は責任をもたされてはじめて、その責任を喜んでひき受けるようになる。そしてこれらの指導者が核となり、中央政府の要職につく者が育っていゆくのだ」[トレヴァー＝ローパー, 1994 下:215]。

[9]これは、M・ブロシャートの指摘である[Broszat,1970:399]。また、J・ニョマーケイの研究[Nyomarkay, 1967]も参照。

であったと彼はいう。実際に、ゲッベルスの次の発言はこれを明確にしめすものといえる。「ナチズムは個別の事柄や問題を検討してきたのであって、その意味でひとつの教義をもったことはない。……今日われわれは『生存圏』について語っている。ひとはおのおの欲するところのものを表象すればよい」[フライ, 1987:190]。つまりナチズムの世界観は、それを信奉した人々にとっては、それぞれの社会的動機や願望に応じて多様に表象することが可能な一種の行動指針にすぎなかったのである。

もっとも、だからといってナチ・イデオロギーが単なるまやかしだということにはならない。ナチズムはたえず真剣に「民族共同体」の実現をめざしており、個々の党メンバーはそれぞれがイニシアティヴをとって、独自に政策を実行していた。たとえば、ヒムラーやダレなどのイデオローグが「東方大帝国」建設という人種主義的ユートピア構想を着々と具体化し、内相フリックが権威主義的な「官僚国家」の構築に懸命になっていた一方で、シュペーアは「労働の美」局でテクノクラート的美学を実践していたし、ライのドイツ労働戦線は「労働の貴族」の「業績共同体」という福祉国家的ヴィジョンを練りあげていた。ナチ世界観の内容は漠然としていたため、そのイデオロギー的目標はきわめて多様に表象され、個々の政治活動のなかでそのつど具体的な意味を獲得すると同時に、それぞれのイメージが相互に矛盾するということになったのであった。

（3）社会ダーウィン主義的「闘争」概念

ナチ党員の多様な政治的実践を結びつけていたのが「民族共同体」という共通のモティーフであったが、この曖昧な概念は反ユダヤ主義、反ボルシェヴィズムといったかたちで、たえず外部の敵をしめすことによってその範囲をネガティヴに規定されるにすぎなかった。ナチ・イデオロギーの表象世界においては、こうした「友・敵」論にもとづく社会ダーウィン主義的な「闘争」の観念が中心的な位置をしめており、これが著しく競合的なナチズムの政治を規定していた。ナチズムの自己理解にとって、政治とは権力を獲得するための「闘争」であった。「狂信的な世界観」を基盤とし、「鉄のような決意」にささえられた情け容赦のない「闘争」、この若々しく熱狂的な闘争に参加し、ラディカルな行動主義的エネルギーを解き放つことによってのみ、「民族共同体」というユートピアはリアリティを獲得しえたのだ。

ところが、この「闘争」は「民族共同体」外部の敵にたいしてだけでなく、内部にもむけられていた。「労働の闘い」、「ドイツ的経営の業績闘争」、「生産の闘い」など、さまざまなキャンペーンにおいて「闘争」のレトリックがもちいられ、突撃隊員は「政治の兵士」、労働者は「労働の兵士」とされ、労働組合は「ドイツ労働戦線」という軍隊的な

イメージで脚色された。つまり、「体制の敵」は――潜在的なかたちで――「民族共同体」の内部にもいたのだ。しかも重要な点は、ヒトラー自身、体制の内部に「闘争」をもちこむことを歓迎していたということである。彼は、あらゆるレヴェルでくりひろげられるこうした社会ダーウィン主義的な恒久闘争の過程から、新しいタイプの政治指導者が淘汰選別されてくることを期待していたのである[10]。そして、これこそが「民族共同体」のダイナミックな――ナチスの語法では「有機的」な――原理をあらわすものであった。

しかしこの体制には、指導者のカリスマ的権威をのぞけば、内部の権力闘争を調停する正規のルートがまったく存在しなかった。党内対立に言及することは原則的に禁じられ、正式な審議機関によって利害調整を制度化することは妨げられた[Mommsen, 1983:4][11]。あらゆる紛争はヒトラーの意志によってもっぱらアドホックに調停され、結果的に内部対立は放置されたのである。そもそもこうした結果にならざるをえなかったのは、「友・敵」論に規定されたナチズムの「闘争」観念が、ナチ・メンバーに妥協なき「断固たる態度」を要求し、一切の利害調整の可能性をつぶしてしまっていたからであった。ナチ・イデオロギーは、政治的利害が多様であることを原理的にみとめなかったため、競合する権力集団間の利害を調停する手段をもちえず、利害衝突と権力闘争は「指導者の意志」の名においてしか規制できなかった。結束した「民族共同体」という虚構のために、政治的対立は調停されることなく、体制の統治機構のなかへ流れこんだのである。

4 ナチ・レジームの構造

さて、次にナチ体制の政治組織に目を転ずることにしよう。「多頭制」とよぶべきこの錯綜した支配構造は、ナチズムの統合主義的なイデオロギーと明白なコントラストをなしていた。ナチスはたえず結束した「民族共同体」の実現をめざしたのであるが、それを実現するための政治的装置は、その目標の足元をすくう方向に働いていたのである。そこに作用した政治力学を解明するために、以下では、前節で見たイデオロギー的諸要素が、ナチ政治の実践においてどのように具体化され、政治権力をどのように組織したのかを検討していくことにする。

---

[10]『わが闘争』のなかのヒトラーの主張によれば、ナチズムは「貴族主義的原理によって、最良の人物にその民族の指導と最高の影響力を確保するようにしなければならない」のであって、この「ふるいわけ」は「日々の生活の闘争がたえずおこなっていく活動」[ヒトラー, 1973 下:108]によるものであった。

[11]このことはとくに、三八年を最後に閣議が召集されなくなり、調整機関としての内閣が機能を失ったことによくあらわれている[Broszat, 1969:350]。

（1）「均制化」の過程

ナチ支配の実態を知るうえで、「民族共同体」の建設を目的とした「均制化」がどの程度まで達成されたのかを検討することがまず必要であろう。この点については、近年の実証研究はそれがきわめて不徹底におわったことを明らかにしている[12]。たしかにヒトラーは、「ナチ民族主義国家をその活動の目標と見ているナチ運動は、この国家の将来のすべての制度を他日この運動じたいからつくりださねばならない」[ヒトラー, 1973 下:314]と説いている。しかし、ナチ党が権力を掌握したとき、彼らには新たな権力機構がどうあるべきかについての明確な構想が欠けていた。しかもヒトラーは、「第二革命」をもとめる突撃隊のラディカリズムにたいして一貫してブレーキをかけつづけた。ナチズムのように、あらゆる階層に救済を約束することで広範な国民の支持を獲得し、しかも伝統的エリート層と連合するかたちで権力を掌握した運動にとって、あらゆる既成集団・組織の画一化というのはリスクが大きすぎたし、ナチ党の実力からして不可能であった。現実の政治過程としての「均制化」は、国家制度をトータルに画一化することはできなかったのである。

P・ヒュッテンベルガーが主張するように、それぞれの組織・機関は名目上は「均制化」され、ヒトラーの意志の実現のための強制手段とされていたが、同時にそれらは伝統的な意味における圧力団体としての性格も維持しつづけ、党指導部や政府各部局にたいしてさかんにロビー活動をおこなっていた[Hüttenberger,1981]。たしかに共産党や社会民主党、そして多くの労働組合は突撃隊のテロによって徹底的に破壊されたが、それ以外の大部分の組織、とくに国家機構・国防軍・産業界などは、ナチ党の侵入にほとんど見舞われることなく一定の自由裁量を保持しつづけ、多くの場合には党幹部による指導ポストのひき継ぎがおこなわれたにすぎなかった。したがって、第三帝国のもとでも各種の集団間の権力闘争や利害衝突は消滅しなかったどころか、むしろ激化したのだった。

これにたいしてナチ運動のダイナミズムは、新たなエリート連合の権力利害のために一定の範囲に押しこめられた。突撃隊指導者レームの粛清は、運動の「革命」的エネルギーをせきとめ、ナチ党および突撃隊をもっぱらイデオロギー教化を任務とする二義的な大衆組織へ追いやろうとしたものといえる[13]。しかし他方では、大衆運動としてのナチズムにとって、「運動」の社会的エネルギーは必要不可欠であった。したがって、彼らの暴力的ダイナミズムは新たな国家制度の内部にもちこまれ、アナーキーな権力闘争が体制全体で恒常化することになった[ポイカート, 1991:401]。しかも、この「闘争」は世界観上の敵に

---

[12]とりわけ、P・ヒュッテンベルガーの研究[Hütenberger, 1981]を参照。

[13]これによってとくに「古参闘士」の間で鬱積したルサンチマンは、ユダヤ人にたいするテロ行為——たとえば三八年の「帝国水晶の夜」——として爆発することになった。

たいする非情な殲滅戦争としてあらわれただけでなく、昇進と利益をもとめる個人的闘争、すなわち社会的モビリティというかたちでもあらわれた[Mason, 1981:39]。いまや、出世欲にかられた無数の党メンバーの野放図な権力要求やライバル争いがあらゆる領域で噴出し、第三帝国の権力機構をますます分断していくことになる。

（2）「指導のカオス」の構造

「指導者国家」における「指導のカオス」[Bollmus, 1970:236]という有名な表現にしめされるとおり、ナチ支配の現実は「指導者国家」とは裏腹のカオス的な構造を内実としていた。なによりもまず、ナチ党組織じたいが緊密な一体性をもってはおらず、きわめて多様な権力装置に分裂していた。党機構の頂点に立っていたのは総統代理ヘスおよび党官房長ボルマンであったが、彼らは党を完全に統制していたわけではない。というのも、大管区指導者は一貫してヒトラー直属でありつづけたし、党機構のほかにも、親衛隊やヒトラー・ユーゲントなどの党分肢組織、ドイツ労働戦線やナチ国民福祉事業団などの党関連団体がたえず増殖をくりかえしていたからである。これら諸機関の間の抗争は、一方では個々の党幹部の権力欲にもとづいていたが、他方ではそれぞれの組織が把握する個別的集団・階層の下からの活発なつきあげにも由来するものであった[14]。

しかもまた、ヒトラーの「人格的指導」は、実際には多くのアドホックな機関を場当たり的に設置し、その全権を党幹部に個人的に委任するということを意味した。したがって、ヒトラー直属の特別行政機関がつぎつぎに新設され、これが党幹部のイニシアティヴのもとで著しく膨張して、既存の国家機構への干渉をくりかえすことになった。その典型としては、ゲーリンクの四ヵ年計画本部や、アウトバーン建設を任務とするトーット機関、軍事生産の権限を集中したシュペーアの軍需省などがあげられる。ナチ体制は、内部にこうした新しい権力機関を増殖させ、従来の権限・管轄体系を大きく撹乱して、たがいに激しく競合しあうこれら多くの「独立王国」の寄せ集めへと分解していったのである。

個々の権力機関はそれぞれの支配領域で全権を行使したが、みずからの権力地位を確保するためにはたえず「敵」とたたかわなければならなかった[15]。こうして、さまざまな党組織が国家機構や国防軍などと競合・癒着しつつ、相互の間で複雑な権力ゲームを展開す

---

[14]たとえば、労働者階級の統制を目的として組織されたドイツ労働戦線も、実際には労働者の要求を代弁する一種の準労働組合的な役割をはたしていた。この点については、T・メイスン[Mason, 1977]やG・マイ[Mai, 1986]の研究を参照。

[15]ここに生じた激しい権力闘争は、一部には各機関の権限の範囲が重複していたためであり、また一部には各機関の間の政治的調停と利害調整をおこなうべき協議機関が欠如していたためであったが、さらには党幹部による役職の兼併の結果でもあった。

ることになった。そこでは、親衛隊と国家機構とが党組織にたいして共同戦線を張るといった局面もみられたのであった。R・ボルムスが「官職のダーウィニズム」とよぶように、この権力ゲームを貫いていた原理は「征服者の権利」・「簒奪者の権利」であり、そこでは社会ダーウィン主義的な生存競争と自然淘汰が実践原則となり、この権力争奪戦で勝利をおさめた機関がそのことによってすぐれた機関たることを証明したのである[Bollmus, 1970]。

この闘争で勝利をおさめるために、それぞれの党幹部たちは自己の支配領域における「指導者」の代理として、「指導者の意志」を後光として無制限に権力を行使し、たえず「民族共同体」の理念を具体化していった。彼らを行動にかりたてるためにはヒトラーの正規の指令は不要であった。これら「リトル・ヒトラー」たちは、しばしば虚構にすぎなかったヒトラーの指令から権威をひきだし、指令がないところでもこれを実行したからである。しかもその過程で、彼らはヒトラーの政治スタイルを模倣していた。つまり党幹部たちは、「民族共同体」を建設するためには容赦なく「闘争」せねばならないという「指導者」の行動規範を実践していたのだ。したがって、外部にむけてたえず「闘争」する「民族共同体」は、こうした無数の模倣を通じて内部にもつぎつぎに増殖し、これら多くの「共同体」がたがいに衝突をくりかえすということになったのである。

（3）「指導者」の機能

しかしながら、こうした著しく交錯した支配状況は、独裁者の権力地位に矛盾するものではなかった。いやむしろ、こうしたアナーキーな内部構造こそがヒトラーの権威に逆作用をおよぼし、彼の権力基盤を形成したというべきであろう。というのも、彼はこの競合関係から超越して君臨し、「総統命令」によって決定を下す「最高審判者」、対立する諸勢力を自己のカリスマで調停することのできる唯一の統合者として、ナチ体制に不可欠な政治的凝集力をなしたからである[Nyomarkay, 1967]。そこでは、諸勢力がヒトラーの支持をもとめて衝突をくりかえせばくりかえすほど、ますます最後の決定権が彼の手に集中することになった。要するに、ヒトラーをめぐってはカリスマと派閥主義とがたがいに規定しあうという自己準拠的な循環が成立していたのであり、体制内の根深い権力闘争がそれを調停しうる唯一の存在としての「指導者」の権威を絶対的なものとする一方で、逆にそのことがさらに彼をめぐる激しい競合関係の誘因となったのである。

こうしたヒトラーの権力地位は、体制内の紛争にたいして彼自身がつねにアドホックに対応したことによって強められた[Mommsen, 1983:10]。彼の即興的な政治指導は権限のヒエラルヒーに拘束されないため、彼の権威に結びついた忠誠関係が体制全体に拡張して、

あらゆるレヴェルで政策決定過程の分裂が進行することになった。それどころか、ヒトラーは明らかに統治機構の整備と強化を意図的に阻害していた。このドイツの独裁者は、あらゆる制度的拘束から脱却することによってのみ、自由な恣意と恩寵にもとづく支配を拡大することができたのである。さまざまな機関の間に衝突がある場合にも、彼はできるかぎり干渉せずにこれを放置し、その解決についてはこれら諸機関の力関係のなりゆきにその帰趨をゆだねたのだった[16]。

ただし、こうした支配状況をヒトラーによる「分割して統治せよ」の支配技術の適用から説明するK・D・ブラッハーらの見解をみとめることはできない。たしかにヒトラーはこの多頭制的な権力抗争から自己の支配にとって有利な可能性をひきだしていたが、彼はこの錯綜状況をコントロールできたわけでなく、むしろそれはたがいに争いあう諸機関の生存競争の結果であった[Bollmus, 1970]。その意味では、ヒトラーは権力の建設者であるよりはむしろ、その受益者だったのである[Mason, 1981:25]。いいかえれば、ヒトラーは社会的諸関係の媒介者だったのであり、少なくとも「社会的動機」と無関係な純粋に個人的な恣意という意味での動作主体ではなかった[Broszat, 1970:409]。むしろ諸勢力の間の対立が、結果的に彼の世界観を行動の規範へと押しあげていったと考えるべきであろう。ナチ体制には内部対立を調停する制度がまったく存在しなかったため、諸勢力の間の妥協はもっぱらヒトラー個人に人格化されるほかなかった。P・ヒュッテンベルガーの表現を借りれば「彼らはヒトラーを象徴的な人物に仕立てあげなければならなかった」[Hüttenberger, 1976:431]のであり、それゆえヒトラーの政策決定も諸勢力の間の妥協の表現としての性格が強かった[17]。その意味では、ヒトラーを状況に左右され決断を回避しがちな「弱い独裁者」[Mommsen, 1966:98]とするH・モムゼンの議論も、あながち極論とばかりはいえない。

しかもまた、ヒトラーの権力はこうした役割に自己を同一化させることで獲得されたものであった。彼自身、「指導者」としての自分のイメージが国民的統合にとっていかに重要であるかを自覚していた[18]。この自覚ゆえに、ヒトラーは体制内部の紛争に加担せず、超然とした「指導者」の役割を演じたのである。しかし他方では、こうした役割演技的な態度が、彼の政策決定の足枷にもなっていた。ヒトラーはみずからの権力の源泉が自己の

---

[16]その典型的な例は、ドイツ警察長官ヒムラーとその上司の内相フリックとの衝突や、三〇年代後半の経済政策の推進をめぐる、経済相シャハトとドイツ労働戦線指導者ライ、四ヵ年計画全権ゲーリンクその他の間の対立にみとめられる。

[17]もっともこの点に関しては、ヒトラーがどこで実際に自己の望む決定を下したのか、あるいはどの場合に、すでにあらかじめ決定されたものに承認をあたえるだけの「公証人」にすぎなかったのか、個々のケースをチェックすべきであろう[Hüttenberger, 1976:432]。

個人的な人気にあることを知っていたから、その人気を危険にさらすような政策——たとえば「教会闘争」や「ユダヤ人問題」——に露骨に関わることはできなかった[Mason, 1981:26]。そして、まさにこうした不人気な政策に責任を負っていたのがナチ党であった。国民の批判がナチ党の下級指導者に集中し、「もし総統がご存じだったら」という神話が機能することによって、ヒトラー自身は清廉で誠実なイメージを獲得していた。つまり、ヒトラーのカリスマはナチ党のネガティヴなイメージとの対比によって獲得されていたのである[カーショウ, 1993:89ff]。ウェーバーによればカリスマ的権威の基盤は本質的に「日常性」の領域の外部にある。ナチ体制においても、党が不可避的に日常の政治に関わって信頼を失ったのにたいし、一方のヒトラーはそこから遠く離れた「非日常性」の領域にあって、国家の運命を担って外交に没頭する私心なき政治家とされた。I・カーショウはこれを「ヒトラー神話」とよんでいるが、このような党とヒトラーのイメージの分極化こそが、ヒトラーのカリスマの社会学的基盤を形成していたのであった。彼に集中したカリスマは、不人気な下位の党メンバーのそれを吸いあげることで養分をえていたのだ。

（4）「急進化」のメカニズム

ヒトラーは自己の巨大な名声のうえに体制を統合することに成功したが、しかしこの統合力はたえず内部解体へむかう「運動」のダイナミズムと表裏一体をなしていた。「指導者」にたいする熱狂をたえず活性化し、千年王国的な願望と意志をかきたてることによってのみ、体制内の異質な諸力は統合されえたのである。そして、体制をささえた多様な社会的動機の矛盾が明らかになればなるほど、ますますヒトラーの権威は絶対化されねばならなかった。したがって、ヒトラーのカリスマはウェーバーのいう「日常化」ではなく「急進化」へとむかい、政治的諸目標をたえずラディカルな方向へエスカレートさせる動態化のメカニズムを推進させることになった。このいわば「累積的急進化」[Mommsen, 1981:59]の傾向を強めたナチ体制は、自己崩壊の道をつき進んでいくことになる[19]。

この急進化の過程を概観するならば、その推進力は明らかにナチ運動のダイナミズムからきていた。しかしそのダイナミズムが体制を席巻しえたのは、それ以外の権力集団——つまり国家官僚制・国防軍・産業界——がナチ党の過激な要求に進んで譲歩したからであった。もっとも、ナチ党が要求を通すことができたのは、ユダヤ人問題・治安問題・文化問題といった分野に限られた[Hüttenberger, 1981:457]。これらの分野においては、彼らの要

---

[18]この点については、T・メイスンの指摘を参照[Mason, 1981:35]。とくに、「広範な大衆は偶像を必要としている」[カーショウ, 1987:278]というヒトラーの言葉は、みずからが「指導者」というペルソナに拘束されていることを彼が十分に自覚していたことをしめすものといえよう。

求は他の集団の利害と衝突しなかったから、その過激な要求はこの領域でますますエスカレートしていった。しかも、いったんラディカルな政策が実行され、その効果が証明されると、他の諸勢力も権力を失うまいとして同じ政策を踏襲した。それゆえ、きわめてネガティヴな措置が個々の権力集団によってつぎつぎに模倣され、歯止めを欠いて急速に体制全体に広まることになった[20]。

ヒトラー自身もまた、内部対立を止揚して体制の一体性を保つためには、そのときどきの最もラディカルな政策しか選択しえなかった。というのも、そうした政策だけが利害衝突を惹起せずに、きたるべき千年王国にたいする期待をつなぎとめることができたからである。しかも、党メンバーによって理解されたヒトラー・イメージは、彼らをたえず「闘争」へとかりたてる象徴的な原動力として機能した[Broszat, 1970:408]。彼らは、漠然とした言葉で述べられた「指導者の意志」をよりラディカルな措置へのゴーサインと読みとって、みずからの運動量を増大させていったのであった[Kershaw, 1993:271]。イデオロギーの非現実性と運動の行動主義はあいまって、ラディカリズムじたいが最も「ナチ的」なものとして、具体的な政策目標にとってかわった。こうして、イデオロギーのうえで説かれた「闘争」が政治的実践へと転化し、外にむかって展開された攻撃性は、急進化の度合いを強めながら国家機構じたいを解体してゆくことになった。

要するに、こうした「累積的急進化」が爆発的に進行したのは、ナチズムの千年王国的な政治観と「運動」のダイナミズム維持の必要性のためであったということができる。イデオロギー的目標設定をつぎつぎにエスカレートさせ、運動のダイナミズムを活性化しつづけることによってのみ、結束した「民族共同体」という虚構は保証されえた[Mommsen, 1983:5f]。しかしナチ体制は、いったん動きだしたこの暴力的なダイナミズムにブレーキをかけることができなかった[Broszat, 1970:409]。その攻撃性はとどまるところを知らず、ついには自分自身をも破壊しないではおかなかったのである。

---

[19]H・モムゼンやM・ブロシャートによれば、「累積的急進化」とは、多頭制的権力抗争のもと権力集団間の摩擦・軋轢が蓄積されていくことによって、政策決定のうえで「世界観のネガティヴな諸要素」[Broszat, 1970:405] が選択され、よりラディカルな政策が実行に移されていくメカニズムのことである。これについて、ブロシャートは次のようなテーゼを提示している。すなわち、ナチ体制は三七－三八年頃に「ナチ革命の第二段階」への急進化を推進するか、それとも「旧式の保守的－権威的体制」へ復帰するかの岐路に直面していたのであり、ナチ運動のダイナミズムならびに自身のカリスマ的権威を維持するためには、ヒトラーは前者を選びとらねばならなかったのだ、と[Broszat, 1969:440]。

[20]M・ブロシャートが指摘するように、ユダヤ人問題の「最終的解決」ですら、実際にはこれに関与した諸勢力の間の競合に由来する、個々のばらばらな諸決定の連鎖から生みだされたものであった[Broszat, 1977]。

5 結論

以上の議論から、ナチ体制においては、ヒトラーのカリスマ的統合力と統治機構の多頭制的な分裂とが相互に規定しあう関係にあったといってよいだろう。体制内の権力抗争を放置しつつ、運動のダイナミズムと「指導者」のカリスマ的権威によって体制の外見的一体性を維持しようとしたところに、ナチ支配の本質があった。それゆえに、利害・動機の多様性から生ずる著しく競合的な政治が、絶対的な「指導者の意志」の一体性という語法のもとでおこなわれるということになった。そこでは、結束した「民族共同体」のイメージを強調すればするほど、その実現ために必要な「闘争」はいっそう熾烈なものとなり、それだけ体制内の亀裂は深まった。かくして、諸勢力がたがいに激しく競合・対立をくりかえすという社会ダーウィン主義的な「闘争」が体制全体で恒常化し、「民族共同体」の実現は阻害されたのであった。

とはいえ、ナチスが「民族共同体」理念を真剣に信じ、たえずこれを実現しようとしていたことは疑いない。むしろナチズムの「民族共同体」構想は、それに内在する固有の矛盾によって挫折したというべきであろう。その矛盾とは、「民族共同体」を建設するためにはたえず「敵」とたたかわねばならないという、ナチ政治の実践原則であった。ナチスは結束した「共同体」を表象する一方で、それを実現するためにこの共同体の内部に「闘争」をもちこんだ。実際問題として、体制内部の闘争を通じて体制を統合しようとすることは、円を四角にしようとするに等しかった。ナチズムの政治的レトリックは、たえずそれ自身のよってたつ基盤をほりくずしていたのである。

一枚岩とされた「民族共同体」の内部構造を俯瞰すれば、その中心には指導者ヒトラーが立っており、そのまわりにナチ党・国家官僚制・国防軍・産業界をはじめとする多くの権力集団——それぞれが「共同体」であった——が回転し、ちょうど入れ子の構造をなしていた。外部にむかって闘争をくりかえすこれらの多くの「共同体」は、「民族共同体」の内部でたえず増殖して統治機構をばらばらに解体した。ウェーバーの伝統的支配のモデルにおけるように、それぞれの「共同体」においてはヒトラーの従臣たちが大きなイニシアティヴを発揮しており、さながら封建諸侯のごとき様相を呈していた。たえまない権力争奪戦のなかにいるこれらのサトラップたちは、ヒトラーの寵愛をめぐって競合しあい、ヒトラーの方も彼らをたがいに張りあわせることでみずからの権威の維持をはかっていたのである。そして、ヒトラーの「指導者の意志」はこれらの下位の「共同体」に模倣されることによって体制全体に広まり、逆にそれらの「共同体」が激しく闘争しあうことによってヒトラー自身は漁夫の利をしめ、彼のカリスマの威光は強まった。ヒトラーは「民族共

同体」の聖なる中心であり、たえず流転する現実の政治過程にたいして不動の永遠なるものを表象した。その意味でわれわれは、ヒトラーを「民族共同体」の理想と現実の多頭制的権力構造とを媒介する交点に位置づけることができよう。

要するにナチ支配体制は、相反する二つのモーメント、すなわちイデオロギー上の統合主義と現実の根深い派閥主義とがたがいに規定しあうというパラドクスから成り立っていたということができる。一方には結束した「民族共同体」の具現者たるヒトラーが立っており、他方には熾烈な派閥闘争をくりかえすいくつもの権力ブロックがあって、両者は統合と分散というまったく反対の方向へ引っ張りあっていたのである。この張りつめた緊張関係は、たしかにこの体制特有のダイナミズムを形成しており、そこからナチ体制の驚くべき政治的動員力も説明できる。しかし、このダイナミズムは同時に内部解体へむかう政治的急進化の傾向を内在させたものであって、これによって体制は自己崩壊の道をつき進んだのであった。したがって、ナチ支配体制のなかで統合と分散のどちらの比重が大きかったかといえば、分散化の要素の方が優勢であったようにおもわれる。この体制の多頭制的な分散力にたいしてヒトラーは最後まで闘いを挑みつづけたが、彼でさえこれに勝利をおさめることができなかった。いくつもの頭をもち、巨大な破壊力を解き放った怪物、ヒュドラともよぶべきこの国家の息の根をとめることができたのは、ただ軍事的破局のみであった。

6 おわりに

本稿ではこれまで、イデオロギーと制度のダイナミックな緊張関係に焦点をあてることによって、ナチ体制の政治力学を「多頭制」概念の枠組みのなかで分析してきた。こうした分析が近代国家一般の理解にたいしてどのような貢献をなしうるかについて、最後に指摘しておくことにしたい。

まず方法論的な問題についていえば、本稿がおこなったようにイデオロギーと制度とを明確に区別して論じることは、支配のイデオロギーをうのみにして国家制度を一枚岩的なピラミッドに還元するというあやまちをふせぎ、近代国家についてのより現実的な理解を生みだすことに貢献しうる。近代国家研究がイデオロギーと制度の複雑なからみあいのなかで方向を失っている現状を考えると、これによってはじめてその突破口が開かれ、「社会学的リアリズム」というべきものに近づくことが可能となるであろう。そして、こうした方法論的立場にとって、「多頭制」の概念が親和性をもつことも同時に明らかだ。M・マンがいうように、近代国家が複数の自律的な権力基盤——すなわち政治的権力・軍事的

権力・経済的権力・イデオロギー的権力――によって構成されているとすれば、その複雑な組織のメカニズムを解明するための一つの手がかりを、この「多頭制」概念が提供することになろう。

しかもそうすることによって、われわれはウェーバーの政治理論の射程を見きわめることができるようになる。彼の有名な類型においては、カリスマと官僚制はたがいに緊張関係に立つものであったが、ナチ支配体制においてもまた、D・シェーンボウムがこれを「官僚制化されたカリスマの国家」[シェーンボウム, 1978:236]とよぶように、両者の緊張関係こそがこの体制のダイナミズムの源泉となっていた。しかしナチ体制の支配形態は、カリスマ的指導者と官僚制的マシーンとを実際に結びあわせた場合には、それぞれが大幅に性格を変えてしまうことを示唆しているようにおもわれる。しかもそこには、ウェーバーのえがきだした伝統的支配の要素までもが見られたのである[21]。このことは、ウェーバーの支配類型が歴史的現象においてはけっして純粋なかたちではあらわれず、むしろいくつかの類型の組みあわせとしてあらわれることを、われわれにあらためて確認させる。その意味では近代国家一般についても、カリスマや官僚制の概念だけでなく、伝統的支配についての彼の諸概念も援用して理解してみる必要があるだろう。

ナチ体制は近代国家の特殊な一形態であり、その支配が近代の病理的な側面をあまりにも極限的にしめしたことはたしかである。しかし特殊とはいっても、その特殊性を――たとえば「ドイツ特有の道」というかたちで――強調することに終始して、その恐るべき「魔術的性格」を近代国家一般とは無縁なものと考えてはならない。あれほどまで熱狂的にヒトラーを崇拝したのは近代国家の国民だったのであり、その意味ではナチズムとはすぐれて近代的な問題である。したがってわれわれは、近代のうちにある危険な発展方向をナチズムとの共通性ないしは親近性というかたちでとらえていくべきであろう。ナチズムを解明することは、それを生みだした「近代」なるものの正体を見きわめることにほかならないのだ。

文献

Bollmus, R., 1970, *Das Amt Rosenberg und seine Gegner*, Stuttgart.
Bracher, K.D./Sauer, W./Schulz, G., 1960, *Die nationalsozialistische Machtergreifung*, Köln.

---

[21]ナチ体制における伝統的支配の要素――とりわけその「分節国家」的性格――を指摘して、これを「ネオ・フューダリズム」と規定する研究者もいるほどである[Koehl, 1960]。

Broszat, M., 1969, *Der Staat Hitlers*, München.
———, 1970, "Soziale Motivation und Führer-Bindung des Nationalsozialismus", in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 18.
———, 1977, "Hitler und die Genesis der »Endlösung«: Aus Anlaß der Thesen von David Irving", in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 25.
フライ, N., 1994, 『総統国家』, 芝健介訳, 岩波書店
ギアツ, C., 1987, 『文化の解釈学』, 吉田禎吾ほか訳, 岩波書店
———, 1990, 『ヌガラ』, 小泉潤二訳, みすず書房
Hirschfeld, G./Kettenacker, L.(Hrsg.), 1981, *Der „Führerstaat": Mythos und Realität*, Stuttgart.
ヒトラー, A., 1973, 『わが闘争』, 平野一郎・将積茂訳, 角川書店
Hüttenberger, P., 1976, "Nationalsozialistische Polykratie", in: *Geschichte und Gesellschaft* 2.
———, 1981, "Interessenvertretung und Lobbyismus im Dritten Reich", in: Hirschfeld/Kettenacker (Hrsg.).
カーショウ, I., 1993, 『ヒトラー神話』, 柴田敬二訳, 刀水書房
Koehl, R., 1960, "Feudal Aspects of National Socialism", in: *American Political Science Review* 54.
栗原優, 1973, 「ファシズムと全体主義論」, 『歴史学研究』第397号
Mai, G., 1986, "Warum steht der deutsche Arbeiter zu Hitler?", in: *Geschichte und Gesellschaft* 12.
Mann, M., *The Sources of Social Power*, vol.1, Cambridge University Press.
Mason, T., 1977, *Sozialpolitik im Dritten Reich*, Opladen.
———, 1981, "Intention and Explanation: A Current Controversy about the Interpretation of National Socialism", in: Hirschfeld/Kettenacker (Hrsg.).
Mommsen, H., 1966, *Beamtentum im Dritten Reich*, Stuttgart.
———, 1971, "Nationalsozialismus", in: Kernig (Hrsg.), *Sowjetsystem und demokratische Gesellschaft*, Bd.4, Freiburg.
———, 1981, "Hitlers Stellung im nationalsozialistischen Herrschaftssystem", in: Hirschfeld/Kettenacker (Hrsg.).
———, 1983, 「ナチ支配体制の内部構造」, 後藤俊明訳, 『思想』第713号
ノイマン, F., 1963, 『ビヒモス』, 岡本友孝・小野英祐・加藤栄一訳, みすず書房
野田宣雄, 1988, 『教養市民層からナチズムへ』, 名古屋大学出版会
Nyomarkay, J., 1967, *Charisma and Factionalism in the Nazi Party*, Minneapolis.
ポイカート, D., 1991, 『ナチス・ドイツ——ある近代の社会史——』, 木村靖二・山本秀行訳, 三元社
佐藤健生, 1982, 「ナチズム——ヒトラー主義——ドイツ・ファシズム——最近の西ドイツにおける公開討論から——」, 『紀尾井史学』第2号
シェーンボウム, D., 1978, 『ヒットラーの社会革命』, 大島通義・大島かおり訳, 而立書房
田野大輔, 1994a, 「第三帝国における『民族共同体』——意味空間の政治文化論的考察——」, 『ソシオロジ』第119号
———, 1994b, 「《政治文化論》の視座——クリフォード・ギアツを中心として——」, 『京都社会学年報』第2号
———, 1995, 「《労働者》の誕生——ドイツ第三帝国における身体と政治——」, 『ソシオロジ』第124号
トレヴァー＝ローパー, H.(ed.), 1994, 『ヒトラーのテーブル・トーク』, 吉田八岑監訳, 三交社

（たの　だいすけ・博士後期課程）

The Mechanism of the Polycracy: A Study of the Power Structure of the Third Reich

Daisuke TANO

This study surveys the historical debate on the character of the Third Reich and analyzes the mechanism of the "polycracy" in this regime.

In former period Hitler's state appeared to be a rational and well-organized system of a totalitarian nature, but subsequent historical research has revealed a more complex picture. The traditional view as propounded by K. D. Bracher and others was criticized by the "functionalist" school of M. Broszat and H. Mommsen, who drew attention to the disorganized character of the regime. The political system, they insisted, was by no means totalitarian but rather chaotic: a ruthless competition and rivalry among the various institutions for power and influence. Amplifying this view, I proceed to apply the concept of "polycracy" to the power structure of the Third Reich.

The polycratic structure of the NS regime composed of more than one power center contrasted strikingly with the totalitarian and monocratic nature of the ideology. This study places special emphasis on this peculiar ambivalence, on the dynamic interaction between ideology and organization. In the main part of this article, I examine the constituents of the Nazi ideology, namely the concepts of "Volksgemeinschaft", "Führer" and "Kampf", so as to show that nothing but these factors gave rise to the polycracy in the Third Reich. I also show that the polycratic structure of the regime helped to consolidate and enhance Hitler's power. There is no contradiction between his supreme power and a polycratic and altogether disintegrated system of government: both conditioned and enforced one another.

This mechanism of "polycracy", however, developed a momentum of its own which it was difficult to control, and sparked off the energy of destruction and ultimately of self-destruction too. In conclusion, I insist that this process of "cumulative radicalization" which ended in total war and genocide should not be portrayed as the work of a deliberate dictatorial will, but rather as the consequences of the polycracy, of the way in which political power was organized in this regime. The historical assessment of the Third Reich cannot conveniently be reduced to the role of Hitler who is a singular phenomenon unlikely to re-emerge in the future. The conditions and structure which allowed him to gain overall control of a modern society have not changed that much and are therefore a more worthwhile topic for further scrutiny.